身近なまちの風景物語(13)

守る現役

まちに住む人たちの共用の場や設備を目にすると、気になって仕方がない。

たとえば町内会の掲示板。ついつい目で追って読みたくなる。盆踊り、ラジオ体操、敬老会、ゴミの分別、…等々。ここからまちに住まう人たちの様子が窺える。このまちでは、どういう人たちが、どのような暮らし方をしているのか、想像がかきたてられる。

ひっそりと道端に佇む井戸もそうである。ついつい手で触れてしまう。留め具がなければ、動かして、水が出るかどうかを確かめたくなる。適度に動かさないと、サビついて動かなくなるのではないかと自分に言い訳をして。

そして水が無事に出てくるとホッと一安心。しっかり現役だなと。一方で、近所のおじさんに怒られないかと内心はドキドキであるが･･･。

たいていの場合、飲用水にはならない。道路沿いの花壇の水やり、道路に水を撒く打ち水などに近所の人たちが利用している。

井戸の脇には消火栓用のホースが備えられていることが多い。近所の人たちはその意味を知っている。

木造家屋が建ち並ぶまちでは、火災時の初期消火が特に重要である。消防車が来るまでの間、住まい手たちでできる消火活動が、延焼の拡大を防ぐことにつながる。

かつては井戸がまちの住まい手たちを呼び寄せた。文字通り、井戸端会議の場でもあった。共用の井戸が、人と情報を結びつける装置だった。

先の大震災で断水が続いた時、この井戸には多くの人たちが集まったという。飲料用ではないが、トイレなどの生活用水として活躍した。

現在では上水道が整備され、飲用水に利用できない井戸は無用の長物のようであるが、そうではない。井戸がまちの暮らしを守っているのである。現在でも確かにその存在意義がある。

野中 勝利
筑波大学芸術系教授・芸術専門学群長

挿絵：久田琳佳子（筑波大学芸術専門学群４年）